

mallo



豫言

戸田達雄

4

大正十三年九月廿八日印刷納本
大正十三年十月一日發行

編輯 東京府上落合百八十六番地
行人 村山知義

印刷 東京市神田區錦町三丁目十番地
人 廣岡正之

印刷 東京市神田區錦町三丁目十番地
所 白鳳社印刷所

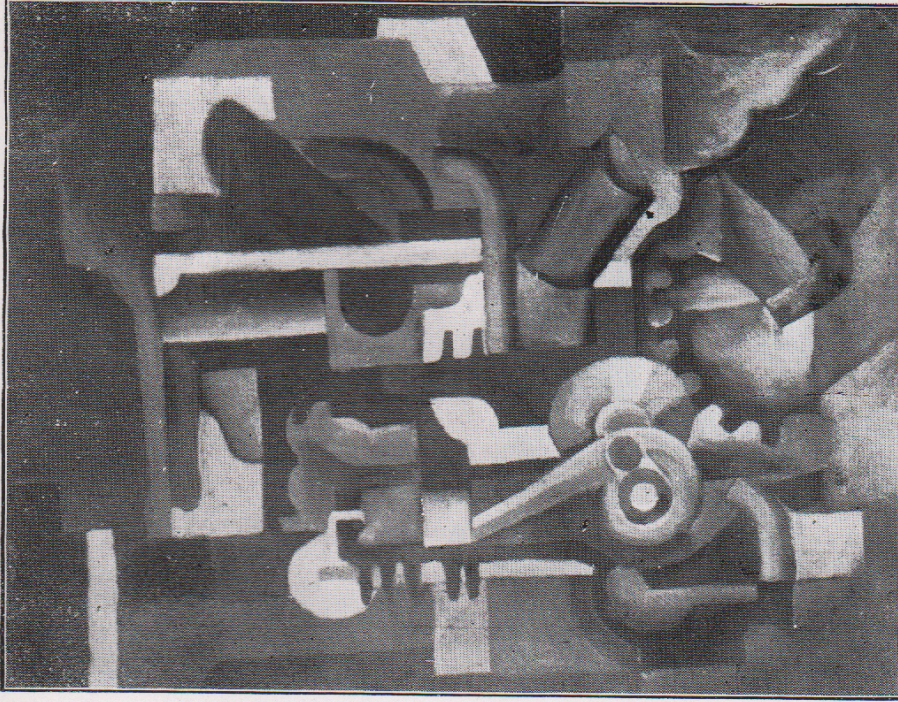
發行 東京府上落合百八十六番地
所 マゾオ出版部

40銭



貴族の似

矢橋八磨



マウオの廣告

- △第三號は發行當日、發賣禁止の上全部押取された。
- おかげ様でひどく損をしたので、第四號から大發展の計畫はダメになった。
- △神田日活館の連續展も駄目になった。権力ある諸君よ。紙膠着なんかはいくら虐待してもいい。藝術冒瀆なんてアキアキいふ肥つた紳士達なんかは耳なんかかき給ふなあいつらはローレルなるアホーなんだから横つ面でもひげたいてやり給へ。だが僕はただ絶望してゐるだけでローレルではないんです。或ひはただ希望を持つてゐるだけでアホーではないんです。だからかへんして下さい。
- △三浦東三君がマウオリストになった。
- △イアンフ・スミヤグヰツチ、岡田龍夫兩君が脱會した。惜しいことだ。
- △九月十五日から月末まで、本郷三丁目のカフェーごんたくで高見澤路直が意識的構成主義的簡展を開いた。
- △マウオ版畫集第四集十五日發行。高見澤、村山の作品が一枚つゝ収めてゐる。一圓五拾錢。申込みは村山方。
- △マウオリストは日活美術館の内部設計、壁畫製作で目下大いそがし。

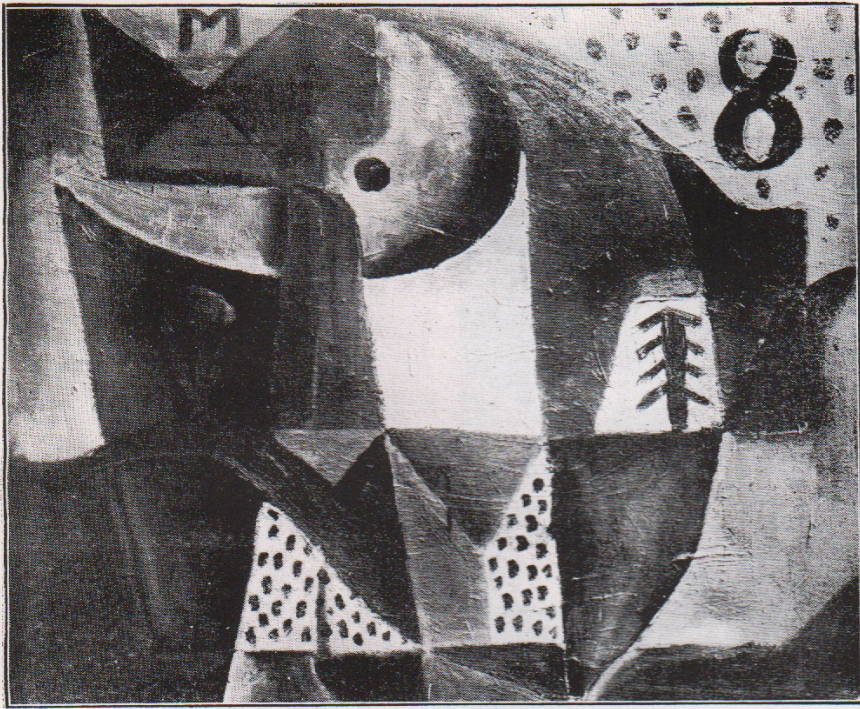
毒病毒病毒病
 毒病毒病毒病
 毒病毒病毒病
 毒病毒病毒病

毒病毒病毒病

毒病毒病毒病

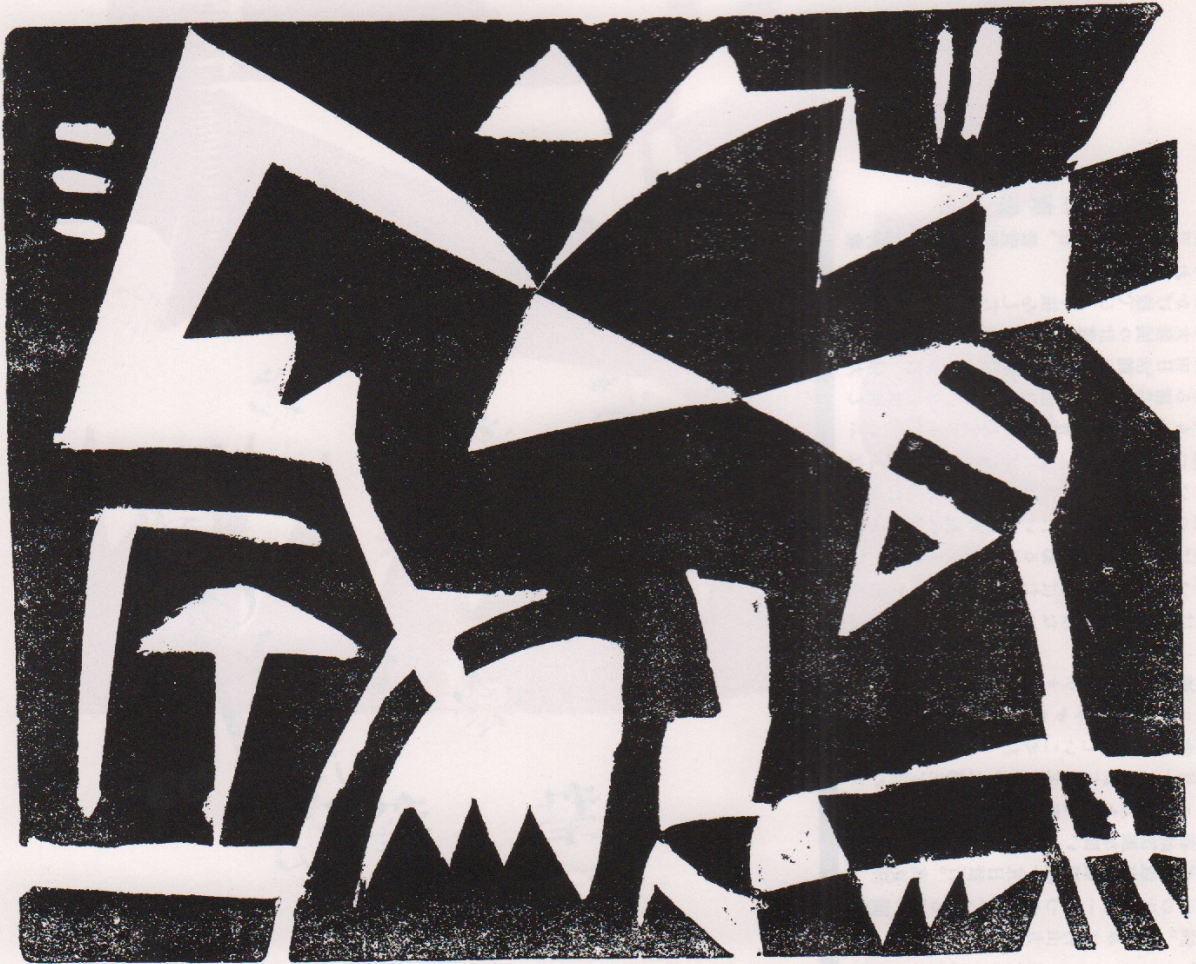
毒病毒病毒病

毒病毒病毒病



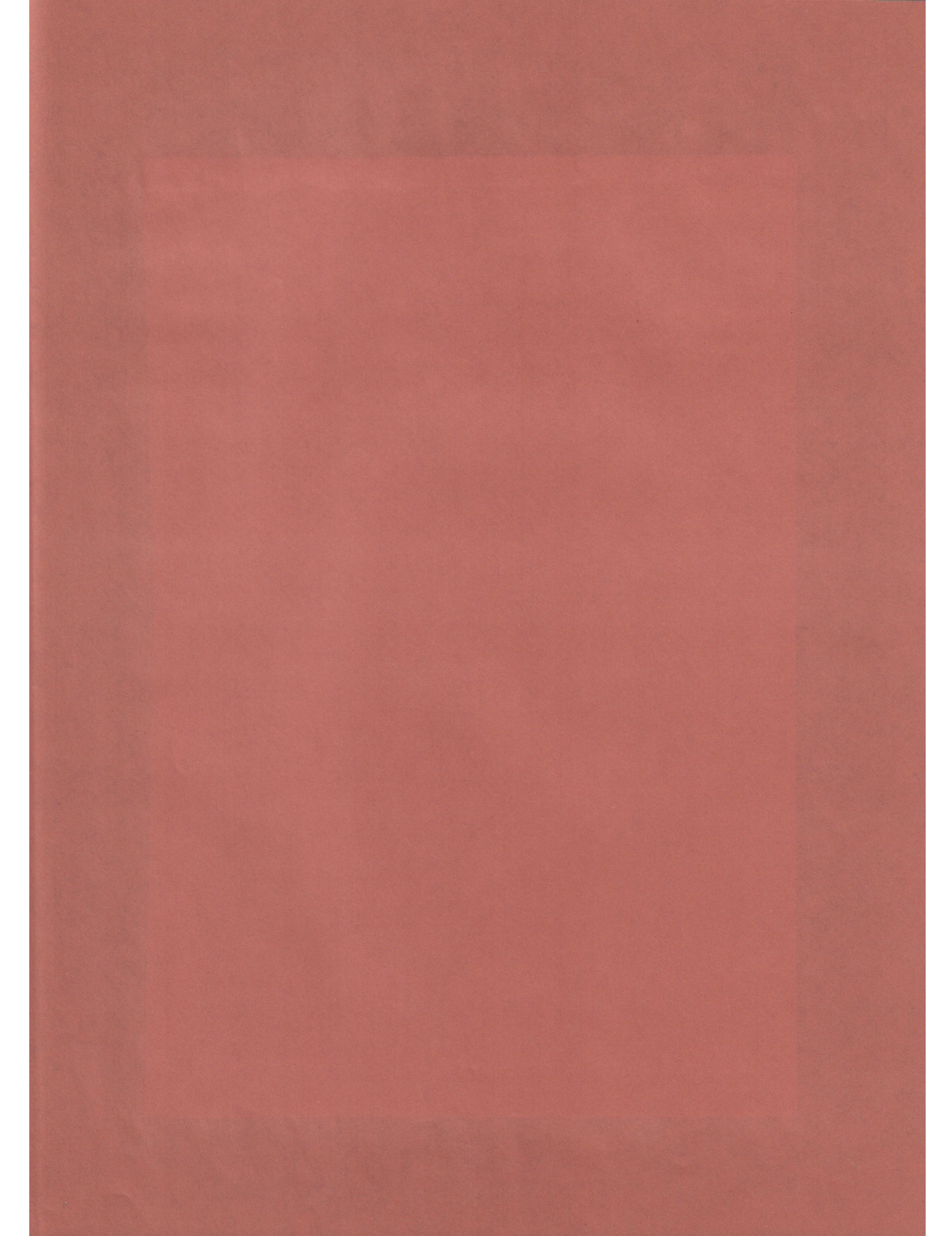
途
上

三
浦
東
三



夜
歸
る

渡
邊
文
彦



れる

× ちんで行く淺緑——淡紫

空と海

水平線上をアメリカ通ひの赤船が行くらしい

きら／＼と灯がみえてくるらしい

なほよく視てゐると——海の上——ばいに船の

世界の生活がひろこつてつた

下積から白眼球がムク／＼と轉り上つてくる

大きなススキない腕が出て叫んだ

「おい兄弟！」

夕風の景色は消メツした

×

バラツルとステツキの突つ立つた丘のこなた

大の字に勝た大入道の線臥像があつて

ケムアエダブツと側に書かれて

貧しい盛花がしてあつた

——丸い砂丘のキララかな傘さかり——

遙かむかう遠淺の海を沖へと

砂まみれの男が真白い裸女を追つて行く

ころぶたびたび笑聲をはさんで

白い飛沫がバツと散る

×

岩の一ツ一ツがむくむくと起きて流木をつつ

こんでゐた メラめらと上つた火にそれは

薄女のむれと知れた

『こらずんべらぼうの東京つべ

○○○○を食ひな□□□を

一つにほひのついたヤツやつべえやよお』

逃げのびた男は一息ついて一人こち

『とでも原始だ』

(二四、九、十七)

感戯

加藤 正雄

じやが芋の様な顔をした男が

嘗て往來を歩いてゐた

一かごの髪の様になつてゐた。

その芽から生れた男は近頃になつて

ふだん着と、よそ行の 畫をかき出した

世の中のヤツ等は

それで我慢がなるものと

みえて皆を踊り出してゐた。

『妙な踊りよ』なんて

うん 誰が知るものか

じやが芋の子だなんてね。

金がほしけれや

女を見つけれ 畫をおかきだ

△△が打つかり合つてゐる

世の中だい

不景氣の時にはじやが芋が賣れまする

ところがそいつらの

バクダンはいやぼん玉だつたのだつて、

今に詩人が七色に飾られた

□□なんて云ふだらうよ じやが芋の

●●△△○○

それでMVかれ。

みんなおしまい

時は二十世紀の中頃

詩三疋

矢橋 公磨

縛縮緬

陋劣な狂人、陋劣な狂人！」おめえは

おめえは情ない自殺者だ。——おーッ！

引けよ——

(アーク燈、赤い電灯 一つ 一つ 一つ

一つ 七縮緬の誘惑は、

わくもり わくもりが押つける護謄

ゴム 煉瓦の呼吸だ！)

黒薇薔

そいつめ！ 喪布をつき破つちまいやがった

黒焦の眼をこすこすさせて——そいつめ

スめ 空氣をおよいて来て黒焦の肉を削り落

した。頭をしゃくつた 齒がぼろぼろ砕けた

そいつめ！ 黒リボンを春貝つて 眼玉のない

黒焦の面をしゃくつた。「フン！」骨が落ち

やがる そいつめ！

馬糞紙

畫面に縫ひつけたタオルの蓋面が俺だ

と——鉄力のよちくれひんまがったのは性的

道徳との妥協を示す

あはてるちやくれた蓋面！ 群集のマント

よちくれひんまがった 群集のマント

裸電線が絶縁高壓線の摩滅が

(フン フン フン フン ふん

食慾——太陽 隠匿 鎖断 消毒

狂犬の臍は享樂の盆にふらふらしてゐる

人間のくせに音かする

機械のくせに性慾を喚る てめえエ！

(時代の狂犬が撲殺場に……)

黄色い虫 三浦 東三

粟粒ほどの黄色い虫がきて
私の鼻の頭をちくちくとさしてつた
するとまもなく私の鼻の頭は膨れだした
ふくれ
ふくれ
顔いつばいになつたーかとおもふと
PON と破レツした

●×○○◇ 増田 博

この女はカーキ色のカーテンの中に端座して
こうばしい味のするカフェエとタバ具ひ
パンをスゝる
螺旋形の階段が三階の天井にまで達し
マフオガニーの手摺がメラメラ滑る
俺は面倒臭いからぶら下つて
上から下まで一ハんに滑つてやつたら
女のヤツどなりやがつた
こいつ失禮な！とおもつたが
待てよ 階下へ降りてリノリウームの上を
この俺のボクサレ靴で
クルクルつと廻つてもう一ハん滑つて見たら
こいつもたまらなくいもものだとおもつた。
暫くしてから俺の書を一枚見せてやつたら
この女笑ひ出しちやつた
そこで俺に繪具代をくれと云つたら
次の部屋から禿頭病の若いおやぢが出て来た
この男まだ二十七と云ふのに
頭の毛が一本もない
こいつの皮膚は生つ白くて

フニヤ フニヤ

外で乞食ボーズが クワ
クワ 空 空 わかしてゐた
何だか解らなくなつて俺は外へとび出した。
クワ クワ 空 空
後で考へてみたら氣モチがわるくなつち
やつて、油くさい袖で
ハツハツハツハツ (一九二四、八、二五)
海にて詩クヅを拾ふ 柳瀬 正夢

× 波がせぶる強迫観念に
革命と云ふ怪物をみた
碎け散る音と飛沫に
もう私のすがたはみえなかつた

× 自然はそれをこまかさうとした
金色の陽に照りががやいて
いなせな聲は出入した
砂丘に棄てられたるものは
海灘ではなくなつて 無産者の乾干だつた

× 干潮の岩から岩と薄ふ男があつた
『あなたは大事な生活をわすれていらつした
ワ』安らかな波にゆられた男の死體を
藻はナヨ／＼とゆすぶつた

× 首 泉
クヒ 泉
過ぎし日世渡りに作つておいた百の首
はあてナ百一ツになつてゐるのが不思議だ
かの不平家は重役になつて

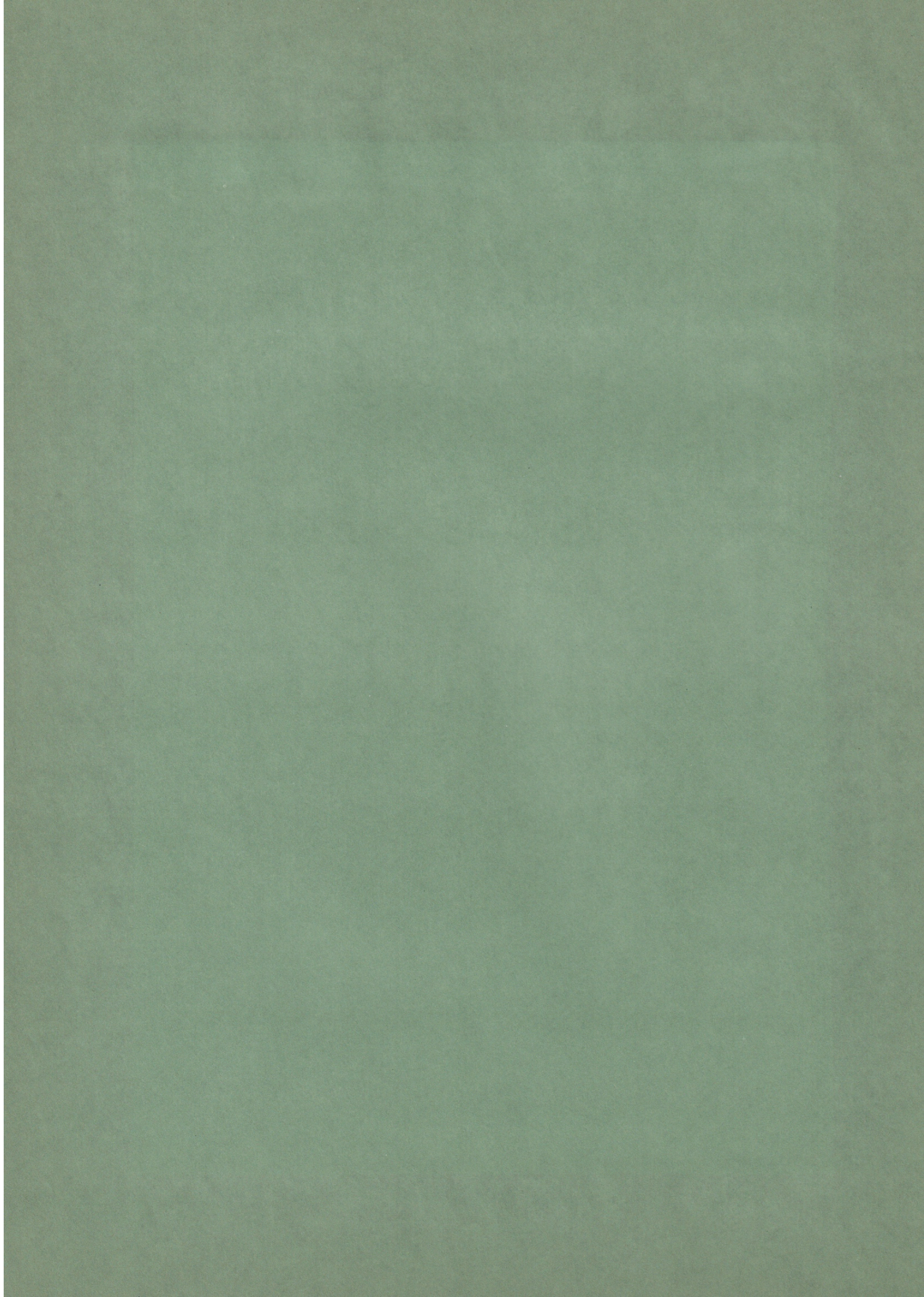
ハイオジに死んだ

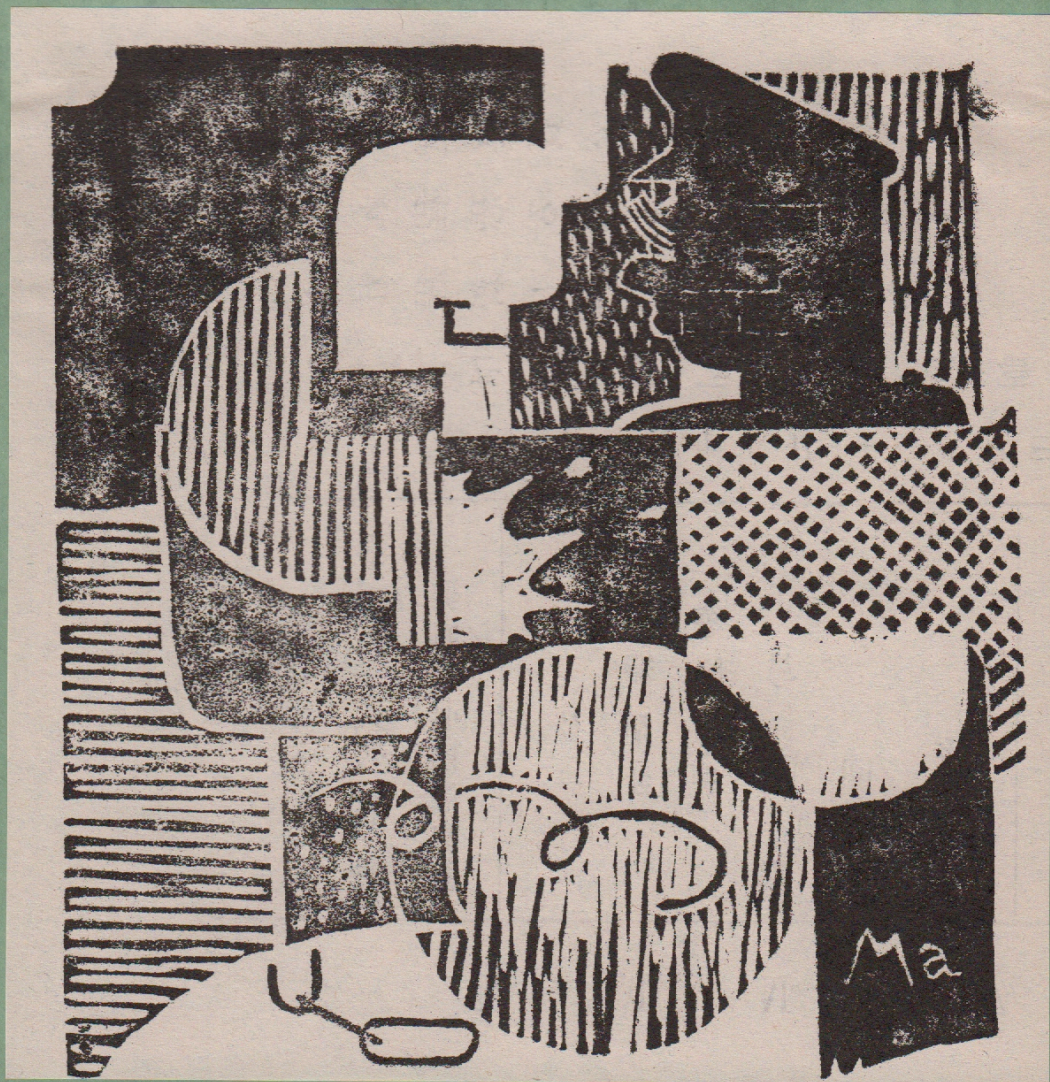
× 瞑想はうつら／＼とメーデーの行列のシヤボ
に加つてゐた
小魚の大群は矢の如く走つて逃げた
すわこそとオツテホリの私の頭が
透明な水脈をたどつて
一散に追つかけた がすぐ私は水の中でぶ
つかつた岩に頭をかまれてしまつた
直ぐ鼻先にとりつくろつてゆる／＼と練る行
列をみながら
頭を失つた體は岩の上
陽を浴びてうつ／＼とする

× 『これを一鉢々々に植えかへたらとても高價
なものだぞ』黒潮の流れる海岸線一帯の漁村
は花の色にうもれてゐた
社會思想に精通しられた若様が
「共産村」をオールバックの頭に
おつたて初めたのはその時からだつた

× 『國境なんてべもぼうなものがあつてたまる
かいみろ』
『腹をべつてうそぶいてゐる君と同じで
結局それは観念の世界だよ』
四時に近い磯砂の上に碧空は高く軽く微笑む

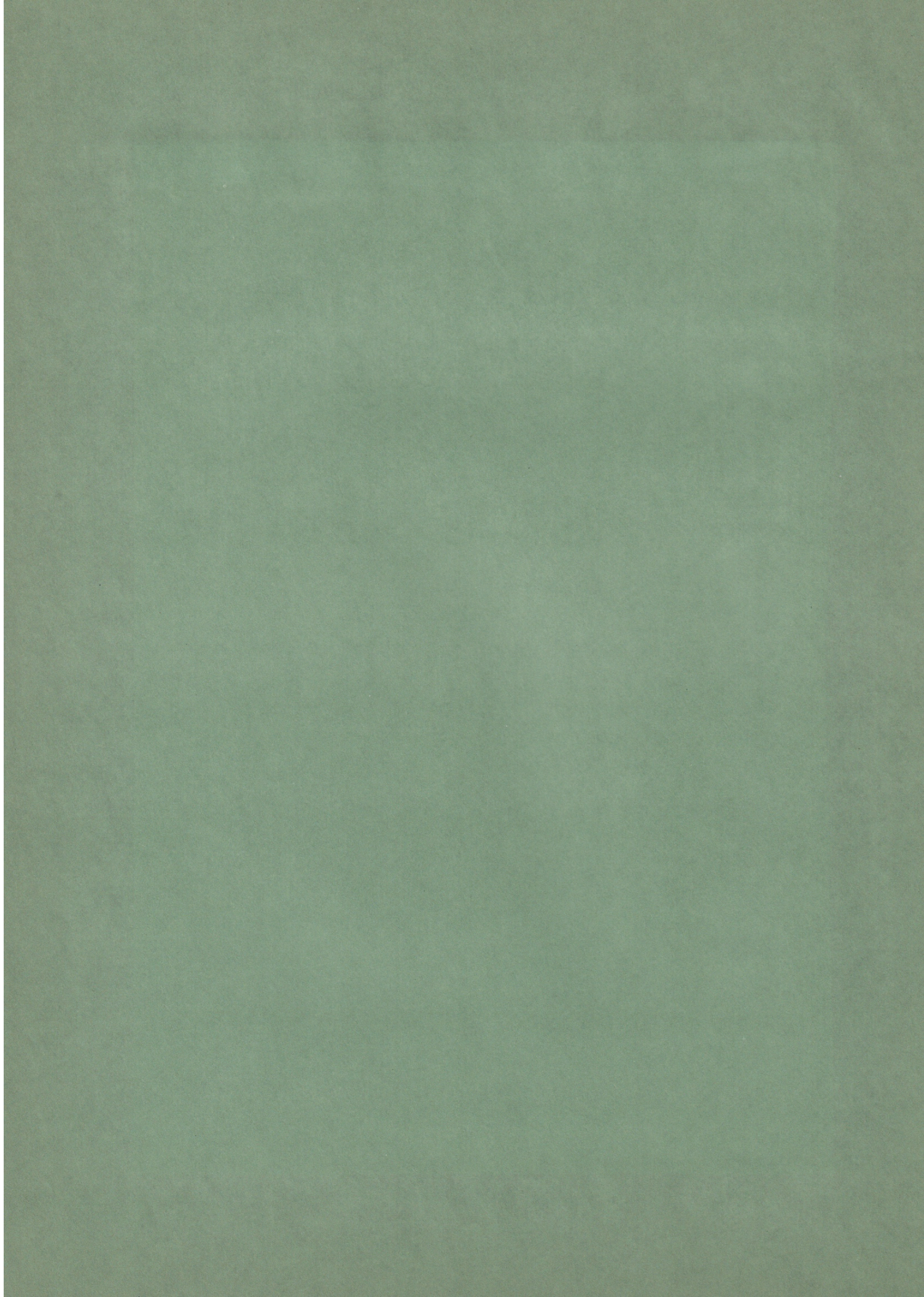
× 光の
腹にあつてはハツラツとはれかへること
メーデーの朝生れたコは手を動してまるこぶ
くさいことくさいこと
アカの太腹から形したフカノコがつまみ出さ





黒い色に
なる瞬間

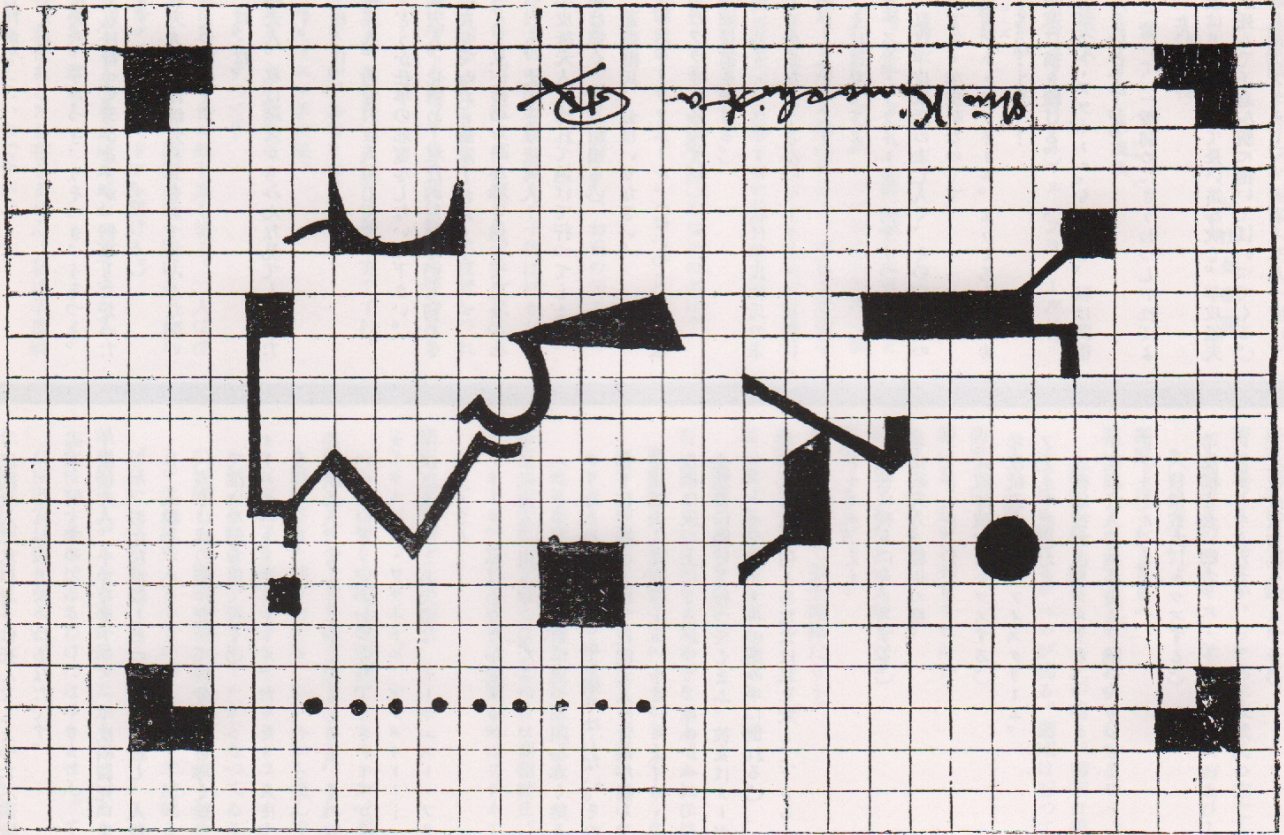
輪
正
義





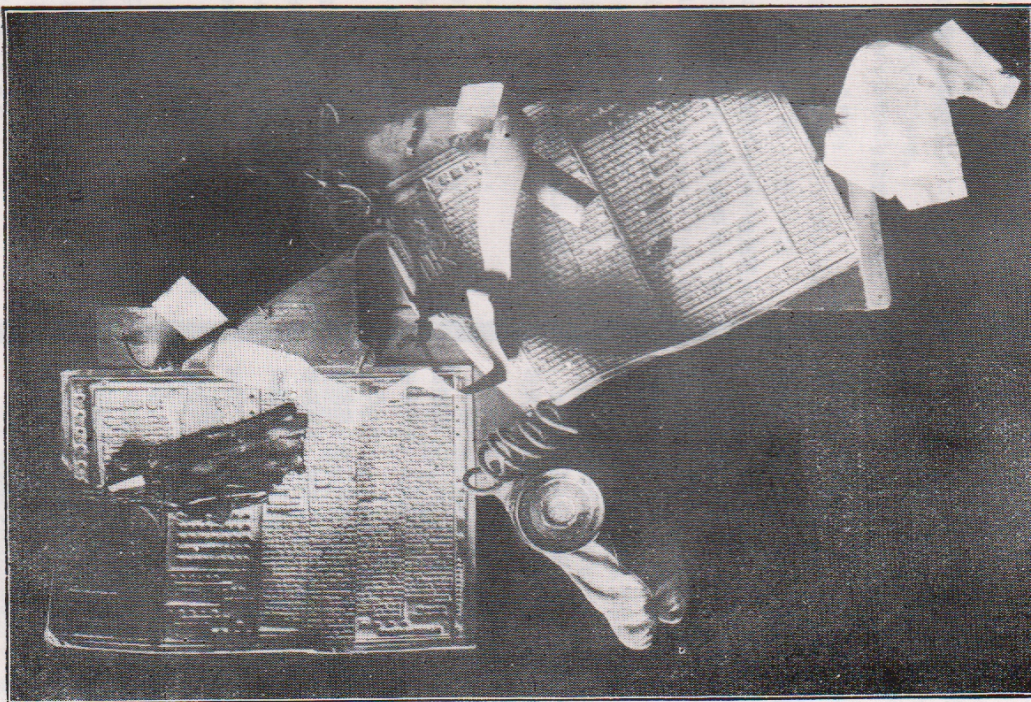
愉快なる城門

加藤正雄



私のオナニ

矢橋公麿



羊皮紙夫人。(はいつて来る)何事もありませんでしたか?

畫家。ええ。

羊皮紙夫人。うそつき、うそつき、うそつき。

畫家。私は誓つて云ひますが、何事もなかつたのです。

羊皮紙夫人。私は鍵穴に耳をあててみんな聞いてしまつたのです。

畫家。は。は。

羊皮紙夫人。私は鍵穴からみんな見てしまつたのです。

畫家。は。は。

羊皮紙夫人。あなたは人殺しです。

畫家。どうか仕事の邪魔をしないで下さい。

羊皮紙夫人。化物め!私はあなたを戀し初めさうになつてゐた。畫家!おほ……

畫家。もし私がこのドアを赤く塗つてしまつたとしたら、ええ羊皮紙夫人?

(羊皮紙夫人は怖れて逃げて行つてしまふ。)

畫家は描く。ベルが鳴る。)

畫家。葡萄酒氏、おはいりなさい。

カーギユスト・フラネール。(はいつてくる)私の名はフラネールです。

(畫家は描き續ける。)

カーギユスト・フラネール。私は羊皮紙氏の未亡人と小さなお子さんのモーリス・羊皮紙におあひしつたのですが。

畫家。それは私ですよ。

カーギユスト・フラネール。何ですつて

畫家。私は羊皮紙氏の未亡人で、その御子息のモーリス・羊皮紙なのです。

カーギユスト・フラネール。もうよろしい。もう。もう……もう!

(畫家は描き續ける。)

カーギユスト・フラネール。もしもし、私は間借りしたいのですが。

畫家。(驚いて)一番初めにさうおつしやればよかつたに。

(彼はドアを開けて長い笛を吹く。羊皮紙夫人が死んで子息を腕に抱いてはいつてくる。)

羊皮紙夫人。フラネール。畫家。(三人一度に)フュー……フュー……フュー……

(彼等は別れ別れに部屋の間隔に座つてちつ

とお互ひを見つめ合ふ。)

羊皮紙夫人。私の息子は死んでしまつた。(畫家に)これを殺したのはあなたです。

畫家。何ですつて?

羊皮紙夫人。小さなモーリス・羊皮紙は死にました。あなたが殺したのです。人殺し。人殺し。人殺し。

(畫家は鏡の前に立つて自分の顔を赤く塗つて泣きながら出て行く。)

カーギユスト・フラネール。たうたう一人ぼつちになつた。

羊皮紙夫人。(フラネールに)もしもし、それはいつたいどういふおつもりでございますか?

カーギユスト・フラネール。アナタリー……

羊皮紙夫人。まあ失禮な、カーギユスト・フラネールさん……

フラネール。私はあなたを愛する。

羊皮紙夫人。出ておいでなさい。

(フラネールは鏡の前に立つて顔を赤く塗るやうなまねをする。しかし塗り直ししない。その代りに、鏡の上に羊皮紙夫人の肖像を描く。)

羊皮紙夫人は立ち上る。小さいモーリス・羊皮紙は床の上にごろがつて、生きかへつて一生懸命に馳けて行つてしまふ。彼女はカーギユスト・フラネールの腕の中に倒れる。)

羊皮紙夫人。何とあなたは私を愛して下さるんでせう!

フラネール。ええ。

(彼は彼女にキッスする。)

羊皮紙夫人。棕櫚の樹。

フラネール。ええ。

(彼は彼女にキッスする。)

羊皮紙夫人。莓のアイスクリーム。

フラネール。ええ。

(彼は彼女にキッスする。)

羊皮紙夫人。抽斗夫人。醜いガウン。

フラネール。ええ。

(彼は彼女にキッスする。)

羊皮紙夫人。御者。

フラネール。ええ。

(彼は彼女にキッスする。)

羊皮紙夫人。リユー・デ・サン・ペール、二十五番地。

フラネール。ええ。

(彼は彼女にキッスする。)

羊皮紙夫人。まるはだか。

フラネール。ええ。

(彼は彼女にキッスする。)

長い笛が聞える。畫家が現はれる。物凄く様子である。髪は亂れ、手には濡れた海綿を持つてゐる。鬚を剃つてゐる最中だつたことは明らかである。)

畫家。(鏡の上の羊皮紙夫人の影繪を見て)有難う。(海綿を繪に投げつける。間。)

畫家。(演説口調で)君の作品に署名してくれ給へ、お若い。)

(カーギユスト・フラネールは海綿のために消えた所を修正して、大きなふるへた字で署名する。)

カーギユスト・フラネール

畫家。プーボー!

(彼はその鬚をブルーズを引きちぎつて取る。)

羊皮紙夫人。まあ!あなた。

フラネール。羊皮紙氏。

羊皮紙夫人。この間の晩、ルタビス夫人の所であなが私にお尋ねになつた詩の本がここにありません。ではもう用は済みました、葡萄酒さん。

フラネール。フラネールです。

羊皮紙夫人。フラネールさん。

(オカギユスト・フラネールは出てゆく。)

羊皮紙氏。(羊皮紙夫人に)さあ。

(彼は彼女の髪の毛を掴む。)

羊皮紙氏。姦婦め!(彼は彼女を蹴る)人殺しめ!

(どなる)お前の子供、私達の子供!お前はいつたい私の子供をどうしたんだ

(小さいモーリス・羊皮紙がカレンダーを持つてはいつてくる。)

七月 十四日 火曜日

聖アナタリー

可愛いお母様

今日はおあなたの誕生日

あなたは遠くにゐたのだとお父様が云ひました。

羊皮紙夫人。可愛い子供。

(羊皮紙氏夫妻は競つて子供を可愛がる。二人の唇は合ひ、一瞬間キッスする。ベルが鳴る。)

畫家。(腹を立てて)おはいり、フラネール氏!(葡萄酒が大きな箱を持つてはつてくる。彼はプロンドの鬚を持つてゐる。)

葡萄酒。羊皮紙氏はおいでですか

羊皮紙氏。私がさうです。

葡萄酒。私は葡萄酒と申します。これが當のものです。

羊皮紙氏。牢屋ですか

葡萄酒。いや齒です。

(箱がひとりて開いて黄金の齒が現はれる。)

羊皮紙氏。(羊皮紙夫人にお辭儀をして)誕生日お目出度う。(葡萄酒氏に向つて)いつたい何故あなたはプロンドなんですか

葡萄酒。私は今迄だつていつもプロンドだつたんです。

葡萄酒氏。いつも葡萄酒。いつも。

(間。)

羊皮紙氏。(演説口調で)葡萄酒さん、君は最も恥づべき狂言の一員だつたのですよ。

葡萄酒。だが私はあなたの云つた通りをやつてのけたのですよ、羊皮紙氏。

羊皮紙氏。そんな事は聞かずともいい。君がこの家の中で働いた悪事の辨償をしてくれ給へ葡萄酒。だが羊皮紙氏。私を呼んで、私に金を拂つて、私に命令したのはあなたたちやありませんか。

羊皮紙氏。お黙んなさい。君はそのドアを緑色に塗つてしまはないうちは、羊皮紙夫人の眼にも、私自身の眼にも、小さいモーリス・羊皮紙の眼にも怒し難い人なのだ。さあ此處にブラッシュユミ繪具がある。

葡萄酒。あなたはどうしてもあのドアが赤くなつてはならないとおつしやるのですか

羊皮紙氏。いや、緑色だといふに、緑だ、緑だ……

羊皮紙夫人。緑なんです、緑、緑。

小さいモーリス。葡萄酒。なぜお母様

羊皮紙夫人。いまにわかりますよ、坊や。(了)

畫家

佛西蘭ロジエ・ウイトラック

村山 知義 譯

人物

畫家
小さいモリス・羊皮紙

羊皮紙夫人

カーギユスト・フラネール (フラネールはフランネルのこと)

葡萄糖氏

巡查二人

場所

(前室。左手にドア。正面に窓。大きな鏡と

ドア。右手にドア。テーブルの上に本が一冊

畫家はドアを赤く塗つてゐる。純白な着物を

着た小さな子供が一人はいつてくる。子供は

畫家に近寄つて、描くのを見てゐる。)

畫家。お前の名は?

子供。モリス・羊皮紙。(間)あなたの名は?

畫家。僕の名もさうだ。

子供。うそだ。

畫家。うそだつて? (間)うん、お前の云ふ通りだ。

(彼は子供の顔を赤く塗る。子供は泣きながら出てゆく。畫家は描き続ける。羊皮紙夫人

(二十八才)が小さいモリス・羊皮紙をつれてはいつてくる。子供の顔は綺麗に洗つてある。)

羊皮紙夫人。あなた、あなたは悪い方ですれどなたですか、あなたは?

畫家。モリス・羊皮紙。

羊皮紙夫人。うそです。

畫家。うそですつて?

(彼は夫人と子供の顔を赤く塗る。二人は泣きながら出て行く。畫家は描き続ける。ベルが鳴る。彼は行つてドアを開ける。)

若い男。(二十才)羊皮紙氏はおいでですか?

畫家。ああ、君か!

若い男。私はあなたを存じませんが、私は羊皮紙氏におあひしたいのですが。

(彼は名刺を差し出す。)

畫家。(名刺を受け取つて)あの人は死んだよ。

若い男。ほんまですか?

畫家。私が自分で殺したんだ。

若い男。さうですか、ちやあ羊皮紙氏の末亡人と御子息のモリス・羊皮紙さんにおあひしたいのですが。

畫家。出て行きたまへ。

若い男。さうですか、ちやあ出て行きますやう。(畫家は描き続ける。ベルが鳴る。畫家は構はず描き続ける。ベルが鳴る。畫家は行つてドアを開ける。)

畫家。誰?

若い男。私がわかりませんか?

畫家。わかる。

若い男。あなたは人殺しだ。

畫家。さうだ。

若い男。そして多分泥棒だらう。

畫家。さうだ。

若い男。私の名刺を返して下さい。

(畫家は名刺を返す。)

若い男。これは私ではありません。これには葡萄糖氏、齒科醫、リユー・ド・ラ・ゲーター、三十一番地、と書いてあります。私の名はカーギユスト・フラネールです。

(彼は葡萄糖氏の名刺を投げ返す。)

畫家。(彼を押し出しながら)今日は葡萄糖氏。フラネール。(戸のうしろで)私の名はフラネールです。

畫家。葡萄糖。

フラネール。フラネール。

(二人は暫くの間。葡萄糖、フラネール、葡萄糖、フラネールと繰り返してゐる。それから畫家はまた描き初める。石が外から飛んできて窓硝子を壊す。カーギユスト・フラネールが一生懸命で、フラネールとどなつてゐるのが聞える。畫家は窓を閉めてまた描き初める。羊皮紙夫人と小さいモリス・羊皮紙とがはいつてくる。)

羊皮紙夫人。こんな事が起つたからには、あなたにもう此處にゐるわけにはゆきません。すぐにい出ておゆきなさい。

(畫家は描き続ける。)

子供。お母様があなたに出てゆけと云つてますよ。

畫家。(驚いて)どうしてもあなたはこのドアが緑でなければならぬと云ひ張るんですか?

羊皮紙夫人。いいえ、赤です、赤です、赤です、小さいモリス・羊皮紙。なぜ、お母様?

羊皮紙夫人。いまにわかりますよ。

畫家。このドアはひどくいい緑です。

羊皮紙夫人。さあ、何をふざけておいでなんです。もう一度云ひますが、すぐに出て行つて下さい。

畫家。このドアは丁度あなたのお望み通りの色です。緑です。

羊皮紙夫人。ああ! 神様、あなたは私の夫を殺しなすつた。

(彼女は氣絶する。子供はびつくりして逃げ出す。)

畫家。(彼女のわきに身體を横たへて)緑ぢやありませんか、緑ぢやあ、緑……緑……緑……羊皮紙夫人。(いきをふきかへして)さうです、おつじやる通りです、モリス・羊皮紙さん。ドアは緑色です。

畫家。(彼女を抱いて)私はあなたを愛する。アナタリー。私はあなたを愛する、アナタリー……(足音が聞える。)

羊皮紙夫人。(身をふりもぎらうとして)聞えたでせう。

畫家。(抱きしめて)アナタリー。

羊皮紙夫人。行かせて下さい。私はおそろしい。畫家はドアを開けに行く。)

畫家。誰?

葡萄糖。葡萄糖です。

畫家。あの人は今歸つて行つたばかりです。

葡萄糖。いいえ、いいえ。私が葡萄糖なのです。畫家。おはいりなさい。

(葡萄糖氏ははいる。彼は黒い髪をばやしてゐる。)

畫家。おかけなさい。

葡萄糖。新聞をお読みになりますか?

畫家。ええ、新聞はどの新聞もみんな読みます。葡萄糖。どの新聞もみんな。

畫家。ええみんな。

葡萄糖。私はそれだうかがひたかつたのですよ。

(彼はドアの方へ行つて小さな笛を吹く。戸が開いて、巡查が二人はいつてくる。)

葡萄糖。(巡查に)君達の務めをしたまへ。

(巡查は畫家に手錠をはめる。)

畫家。あとで後悔するやうなことはし給ふな、カーギユスト・フラネール。

葡萄糖。私はそんな名ぢやありませんよ。

畫家。カーギユスト・フラネールだ、それはこのドアが緑色であるのと同じに確かなことだ。葡萄糖。それは赤ですよ。

巡查。赤だ、赤だ、赤だ。

畫家。僕の名前がモリス・羊皮紙であるのと同じに確かなことだ。

葡萄糖。さうがあなたは畫家といふ名なんです。

畫家。君の方が僕よりよく知つてゐるといふなら、ちやあ君と一緒にいこう。

葡萄糖。何ですつて。それはどういふ意味ですか?

畫家。(巡查に)君達の務めをしたまへ。

(巡查は動かない。)

葡萄糖。うん、うん、感心な奴等だ! 私の命令を待つてゐるんだな。よし、よし、さあ、君達の務めをしたまへ。

(巡查は動かない。彼等はカーギユスト・フラネールが出て行く時に落として行つた名刺を見附ける。)

葡萄糖氏

齒科醫

リユー・ド・ラ・ゲーター。三十一番地、巴里。

(すると彼等は黙つて畫家の手錠をはづす。)

葡萄糖。悪者め! 何をしてくるんだ?

(巡查は出て行つてしまふ。ドアを閉める時に彼等は首を突つ込んでゐる。)

巡查。齒科醫、齒科醫!

葡萄糖。かんべんならん。

畫家。(演説口調で)カーギユスト・フラネール……

葡萄糖。ええまた。私の名は葡萄糖だといふに!

畫家。その通り。

(畫家は葡萄糖の顔を赤く塗る。葡萄糖は泣きながら出て行く。畫家は描き続ける。)

白兩莊パーラー

神田通神保町二番地

ここに諸君は

完全に藝術的なるカフェーを見出だす

井上喫茶寮

銀座通り

ひどく気持ちのいい

この喫茶寮は銀座には付きもの
